富士養鱒場だより

第259号
令和6年5月号

静岡県水産･海洋技術研究所富士養鱒場 〒418-0108 富士宮市猪之頭 579-2 TEL:0544-52-0311
E-mail suigi-fuji@pref.shizuoka.lg.jp URL https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/fuji/

（目次）

富士養鱒場長・着任挨拶
令和６年度業務紹介・人事異動・転入者紹介
令和５年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態・魚病被害のアンケート調査結果
第 35 回にじます祭りが開催されました
養鱒業若手研修会「稚魚飼育における冷水病対策」

富士養鱒場長･着任挨拶

この度の人事異動で富士養鱒場に着任いたしました飯田益生（イイダ**マスオ**）です。当場のマスコットと同名ながら、これまで富士養鱒場には縁がなく、初めての赴任となります。歴代場長に当場経験者が多いなか、右も左も分からぬところからのスタートで不安とプレッシャーがありますが、業界の皆さんとお話をしていると厳しい状況の中にも前向きなスタンスの方が多く、面白さも感じはじめています。

私自身はこれまで様々な部署を転々としてきており、「専門は何か？」と問われると困ってしまうのですが、ウナギ養殖を中心に、養殖業には比較的長く関わってきています。養鱒業に関しては、平成 26 年に「しずおか農林水産物認証」にマス類の基準を新たに設けることになった際に、県庁の担当として関係の皆さんとともに取り組んだ思い出があります。当時は、富士養鱒漁協が「紅富士」ブランドを立ち上げ、ニジマス大型魚をいかにして生産・販売していくか、模索・チャレンジを始めた時期だったかと思いますが、近年、その生産量が年々増加しているのを目の当たりにして感慨深いものがあります。

近年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響からの回復は見られるものの、昨今の世界情勢を背景とした資材・飼料などの高騰、気候変動の影響、物流の 2024 年問題等々への対応など、水産業界全体が厳しい状況にあります。一方で、養殖ニジマスについては需要の高まりやそれに伴う魚価の向上が見られるなど追い風も吹いています。今後は、こうした変化する情勢に応じた取組を行いつつ、中長期的な視点で経営の安定化を図るような取組も必要となってくるのだと思います。

また、内水面漁業においては、外来魚やカワウによる有用生物の食害の問題が引き続き顕著と伺っています。さらに、遊漁料収入の減少や組合員数の減少などを受け、漁協経営の改善やあり方の検討が、積年の課題かと思います。

このような中、富士養鱒場では現場の課題解決に向けた取組に寄与できるよう努めてまいります。新たな種苗供給先としての海面養殖に適したニジマス系統の開発、これまでの研究成果をベースにした魚病の発生を抑制する飼育方法の検討、販路の維持・確保に向けた養殖魚の「おいしさ」を管理する評価手法の開発、一般の方に養鱒業などへの理解を深めていただくためのデジタルコンテンツの作成、内水面における外来魚による食害防止対策の支援などを行ってまいります。

今年度は、私以外に会計年度職員を含めて２名のニューフェイスを迎え、総勢８名のスタッフが一丸となって、業務に取り組んでまいります。よろしくお願いいたします。私も机の前でじっとしているのが苦手ですので、現場へ顔を出していきたいと思っています。

（場長　飯田益生）

令和6年度　業務紹介

職		氏名	主な担当業務
場長		飯田益生	富士養鱒場業務の総括、全国協議会
総務	主査	佐野雅道	予算・庶務、観覧業務、庁舎等の保守管理
研究科	主任研究員	髙田伸二	試験研究の企画調整 試験研究（新品種開発）
	研究員	瀧川智人	試験研究（魚病、官能評価）
普及班	主査 （普及指導員）	佐藤孝幸	普及指導の企画調整、広報 普及指導（地域水産業の振興）
	主任 （普及指導員）	冨山皓介	普及指導（魚類防疫対策、内水面漁業、 生産業務指導）
会計年度採用職員		植松久男	試験研究補助、飼育管理、場内管理
会計年度採用職員		望月克敏	試験研究補助、飼育管理、場内管理

人事異動

（令和６年４月１日付け）

（転出）	場長　阿久津哲也	→	漁業高等学園長
	上席研究員　中村永介	→	水産振興課　主査
（転入）	場長　飯田益生	←	水産振興課　課長代理
	主任研究員　髙田伸二	←	伊豆分場　主任（普及指導員）

転入者・自己紹介

髙田伸二

４月から富士養鱒場に来ました、髙田伸二（たかだしんじ）と申します。主にニジマスの育種に関わる研究に従事します。

まだ赴任して間もないですが、皆さんが誇りを持って養鱒業に従事される様子を垣間見て、身が引き締まる思いです。１日でも早く皆さんのお役に立てるよう精進いたしますので、よろしくお願いいたします。

令和５年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態・魚病被害のアンケート調査結果

静岡県内のサケ科魚類及び海産魚の養殖業者の方々にご協力いただいた令和５年の生産実態及び魚病被害のアンケート調査結果を取りまとめましたので、概要を報告します。

方　法

県内でサケ科魚類及び海産魚の養殖業を営む経営体を対象にアンケートを配付し、各魚種魚種の生産量と生産額、魚種別及び疾病別の魚病被害量と被害額を調査しました。本調査の対象期間は令和５年１月１日～12 月 31 日の１年間です。

結　果

１　サケ科魚類（表１）

(1)経営体数：延べ経営体数は 49 軒、実経営体数は 32 軒でした。

(2)生産量：生産量は 1,246 トンで、前年比 86%となりました。魚種別に見ると、ニジマスは 1,185 トンで前年比 86%、アマゴは 30 トンで同 76%と減少し、イワナは 13 トンで同 127%と増加しました。

(3)魚病被害状況：魚病被害量は 59 トンと前年比 107%となりました。魚種別に見ると、ニジマスが 57 トンと最も多く、ニジマス生産量の 5%を占めました。

魚種別の主な発生疾病は、ニジマスでミズカビ病、IHN および細菌性冷水病で、アマゴ・イワナではせっそう病でした。

２　海産魚（表２）

(1)経営体数：延べ経営体数は 33 軒、実経営体数は 16 軒でした。

(2)生産量：生産量は 2,004 トンで、前年比では 105%となりました。魚種別に見ると、マアジは 227 トンで前年比 103%、マダイは 1,539 トンで同 107%、ブリは 190 トンで同 100%と前年並であった一方、シマアジは９トンで同 32%と大きく減少しました。

(3)魚病被害状況：魚病被害量は 44 トンで、前年比 69%と減少しました。魚種別に見ると、マアジが最も多く 28 トンとなり、生産量の 13%を占めました。また、シマアジの被害量は 11 トンと、生産量を上回る被害が発生しました。

魚種別の主な発生疾病は、マアジで連鎖球菌症およびビブリオ病、マダイでエドワジエラ症、ブリで抗酸菌症および連鎖球菌症、シマアジで連鎖球菌症でした。特に、シマアジ

では *Lactococcus garvieae* のⅢ型による被害が顕著でした。

本アンケート結果の詳細は、静岡県水産・海洋技術研究所「2023 年度事業報告」に掲載します。

（冨山皓介）

表１　サケ科魚類のアンケート調査結果

魚種	R5					（参考）R4		
	経営体数（軒）	生産量（トン）	魚病 被害量（トン）	魚病 生産量に対する割合（%）	魚病 主な疾病	経営体数（軒）	生産量（トン）	魚病被害量（トン）
ニジマス	20	1,185	57	4.8	ミズカビ病、IHN、冷水病	20	1,372	54.8
ギンザケ	1	5	0	0		1	5	0.0
アマゴ	17	30	1	3.2	せっそう病	19	39	1.3
イワナ	5	13	1	4.7	せっそう病	6	10	0.3
その他	6	14	0	0		7	20	0.0
合計	49(32)※	1,246	59	4.7		53(33)※	1,170	56

※経営体数合計のカッコは実経営体数

表２　海産魚のアンケート調査結果

魚種	R5					（参考）R4		
	経営体数（軒）	生産量（トン）	魚病 被害量（トン）	魚病 生産量に対する割合（%）	魚病 主な疾病	経営体数（軒）	生産量（トン）	魚病被害量（トン）
マアジ	7	227	28.2	12.5	連鎖球菌症（αⅠ、Ⅲ）、ビブリオ病	8	220	36.9
マダイ	11	1,539	4.1	0.3	エドワジエラ症	12	1,440	14.4
ブリ	2	190	1.0	0.5	抗酸菌症、連鎖球菌症（αⅢ）	3	190	3.6
シマアジ	3	9	11.0	129.4	連鎖球菌症（αⅢ）、ビブリオ病	4	27	9.0
海面その他	2	23	0	0		4	19	0.0
陸上ヒラメ	2	14	0	0		1	19	0.0
陸上その他	5	3	0	0		5	2	0.0
合計	33(16)※	2,004	44	2		37(18)※	1,917	64

※経営体数合計のカッコは実経営体数

トピックス

第 35 回にじます祭りが開催されました

令和６年３月３日、「第 35 回にじます祭り」が富士山浅間大社に隣接する神田川ふれあい広場にて開催されました。本イベントは富士養鱒漁業協同組合を中心とした市内関係者が主体となり、例年３月の第一週に開催されています。

今回は、ニジマスを用いた屋台が沢山並びました。毎年人気の塩焼きのほか、ニジマスを使った「クリームコロッケ」、甘露煮をホットドックのようにパンに挟んだ「ニジマスサンド」などが販売され、多くのお客様がニジマスを様々な食べ方で楽しんでいただけたのではないでしょうか。

当場のブースでは大型サイズのニジマスを展示し、重量を当てるクイズを行いました。ニジマスといえば塩焼きサイズのイメージが強いからか、来場者からは「こんなに大きくなるの!?」といった驚きの声も多く聞かれました。

当日は天気にも恵まれ、例年よりも沢山のお客様が来場されたように思われました。

来年は新企画「N-1 グランプリ」（N はニジマス（Nijimasu））が開催され、さらに様々な食べ方が紹介される予定です。ぜひ来年もご来場ください。

（瀧川智人）

にじます祭・会場の様子

養鱒業若手研修会「稚魚育成における冷水病対策」

令和６年２月に開催した第 22 回養鱒業若手研修会は、稚魚育成における冷水病対策について池の事例発表と意見交換を行いました。

冷水病の原因菌は淡水域に広く分布し、魚が衰弱する際に日和見的に発症します。発症した場合には抗菌剤の使用を指導しますが、投薬は応急的な処置でしかなく、根本的な対策は冷水病を発症させない『健康な魚』を育成することです。その方法は端的に言えば『池をきれいに保つこと』と『良い餌を十分に与えること』です。しかし、ベテラン生産者でも日常作業の良し悪しの判断は感覚よるところが大きく、その基準は曖昧です。これらを理論的に実践するには、飼育日誌等日々の記録を集計し「作業の見える化」をすることで、発症の有無や歩留まり等の成績と日々の作業内容を突き合わせて評価し、自池での健康魚育成に必要な作業内容や程度の目安を見出すことが有効です。

そこで、稚魚育成で冷水病に悩む生産者２社が、当場支援のもとで対策に取り組んだ事例について、生産者に発表してもらいました。

＊＊＊＊＊

【Ａ社】従来は冷水病発症による投薬にともなう給餌量の抑制のため、実際の給餌率がライトリッツ給餌率表と比べても大幅に低く、生育の遅延と歩留まりの低下が問題でした。そこで、給餌量の増加を意識したところ、冷水病の発症は見られたものの、発症時期が従来よりも遅く、減耗数も減って、発眼卵収容から屋外池出しまでの間の歩留まりが向上しました。取組後の給餌率は従来の２倍程度となりましたが悪影響は感じられないので、さらなる給餌量増加を試みるとのことでした。

【Ｂ社】従来は IHN 発症による餌止めで給餌量が減り、さらに冷水病の併発で餌を与えられないまま減耗が続く事例が多くありました。そこで、消毒等の防疫対策の強化と給餌量の増加に努めたところ、IHN の発症は無く、冷水病の発症も大幅に減り、給餌量が増えたことで屋外池出しまでの飼育期間の短縮と歩留まりの向上が見られました。特に飽食給餌を目指し、改めて飽食となった魚の外観（腹部の膨らみ具合）を確認して飽食の目安としたことで、確実に飽食となる給餌を行うことができたとのことでした。

飽食の稚魚：鰓蓋から腹鰭の間の腹部が膨らみ
背中側からもパーマークが確認できる

＊＊＊＊＊

研修会で紹介した事例は一例ですが、疾病対策を含め『健康な魚』の育成には給餌がとても重要だと考えます。最近の度重なる餌の値上げで、経営的視点から給餌量を抑えるとの判断もあるかもしれません。ただ、特に健康状態が歩留まりに直結する稚魚期には、高品質な餌を十分量与えてもらいたいと考えます。また、様々な改善に向けた現状把握の方法として、飼育記録の集計・分析にも改めて着目してもらいたいと思います。（冨山皓介）

富士養鱒場の降水量と湧水量

月	降水量（降水日数）：mm（日）		湧水量：万トン/日		月	降水量（降水日数）：mm（日）		湧水量：万トン/日	
	今年	過去平均*	今年	過去平均*		今年	過去平均*	今年	過去平均*
11	243(4)	118(7)	3.45	6.64	2	245(17)	104(8)	2.26	3.04
12	56(5)	97(6)	2.96	5.19	3	375(10)	212(11)	3.57	3.36
1	60(13)	51(5)	2.11	3.79	4	211(12)	255(16)	6.37	4.15

＊ 前年以前の 20 年間平均値

日　誌

令和５年 11 月	令和５年 12 月	令和６年１月
毎週火曜　沼津駐在 １日　バイテク魚作出指導（場内） ６日　業務連絡会分場長会議（Web） ９日　コクチバス駆除活動支援（浜松） 10 日　技術連絡協議会（下田） 13 日　市食育事業出前授業（市内） 14 日　県かん水協会役員会（沼津） 21 日　普及月例会（焼津） 21 日　輸入水産動物着地検査（県内） 22 日　バイテク魚作出指導（場内） 24 日　紅富士麻酔選別作業（市内） 30 日　白糸小出前授業（市内） ＜視察見学対応＞ １日　クルーズ船ツアー（28 名） ２日　富士宮市立白糸小（19 名） ６日　富士宮市立大富士小（138 名） 10 日　クルーズ船ツアー（35 名）	１日　養鱒研修会（市内） ４日　漁業士認定委員会（静岡） ８日　業務連絡会分場長会議（Web） 15 日　輸入水産動物着地検査（県内） 15 日　紅富士革新プロジェクト（市内） 20 日　県かん水協会役員会（沼津） 21-22 日　薬剤感受性試験研修会（東京） 21 日　普及月例会（焼津） 22 日　疾病防除・遺伝的多様性確保研修会（Web） 26 日　バイテク魚作出指導（場内） ＜視察見学対応＞ 14 日　焼津水産高校栽培漁業科（40 名）	９日　業務連絡会分場長会議（Web） 18 日　普及月例会（焼津） 22 日　内浦湾採泥調査（沼津） 23 日　漁業士認定式（静岡） 30 日　にじます祭実行委員会（市内） 31 日　育て鱒ター卵配布（市内）
令和６年２月	**令和６年３月**	**令和６年４月**
1-2 日　アユ資源研究部会（Web） １日　IoT 機器導入支援（島田） ２日　漁業士会総会（浜松） ２日　しずおか認証内部検査（市内） ５日　業務連絡会分場長会議（Web） ８日　養鱒業若手研修会（市内） 20 日　紅富士麻酔選別作業（市内） 26 日　普及月例会（焼津）	３日　にじます祭（市内） ５日　IoT 機器導入支援（島田） ８日　業務連絡会分場長会議（Web） ８日　養殖衛生管理推進会議(Web) 11 日　普及課題設定協議会（Web） 14 日　輸入水産動物着地検査（県内） 15 日　紅富士革新プロジェクト（市内） 18 日　魚病対策委員会（静岡） 27 日　にじます祭実行委員会（市内）	５日　業務連絡会分場長会議（Web） 11 日　普及月例会（焼津） 19 日　漁業士会役員会（静岡） 23 日　県かん水協会役員会（沼津） 25 日　伊豆地域巡回 30 日　水産事業概要説明会（Web）